

緒言

多年、私は、自分が彼の地で語ってきたことを故国日本に伝えたいと念願してきた。彼の地とはヨーロッパの国々であり、語ってきたことは、要するに「日本」であった。ただ、ぜんぶフランス語で語ったことなので、逆に翻訳しなければならぬ。そんな面倒なことはできないと諦めていた。ところが、倫理研究所理事長、丸山敏秋氏が、「倫理文化研究叢書」に収めて出してくださることとなった。そのご好意にすがって夢を実現しえたことについて、まずもって衷心より感謝申しあげる次第である。

青雲の志を抱いて、という言葉がある。そのようにして私も三十歳で渡仏した。仏政府給費留学生としてソルボンヌに籍を置き、良師——ジャン・グルニエ教授——と邂逅したが、結局はそれは自国をよりよく知るためであったように思われる。出国に先立って日本の精神文化復興を念ずる駆け出しの評論活動に入っていたので、パリ生活でも意識はその延長線上にあった。日本での専攻はフランス文学で、コンクールもその部門で受けたが、内面は「日本的靈性」とは何かの問いでいっばいだった。

パリは、フランスを発見させてくれるところではない。自国を、おのれ自身を発見させてくれる場である。その力たるや大したもので、おそらくそれはローマ文明の後継として「ユニヴァーサル」たらんとする意志と矜持からくるものかもしれない。リルケは、『マルテの手記』をパリで書く必要があった。文明の空気が働くからである。愛にも似て、それは、「分かってくれる」という歡喜を掻き立てる。こうして私は一つの国と深い交わりの関係に入り、その国の言語で己自身を、日本を語ることに云いがたい愉悅を感じ、それを

「使命」と感ずるまでになつていった。以下に呈する講演は、こう言つて大げさでなければ、すべてである使命感をもつて語つたところのものである。

といつて、かくべつ、氣負いがあつたわけではない。むしろ、自己催眠だつた。講演の成功につれてより重要な「お座敷」が掛かるようになり、そのつど、氣合を入れて高座に臨んだが、このように自分にマジックをかけなければ踏みだせない勇氣が必要でさえあつた。——「本当の日本大使は俺だ」と。力士が両手で自分の頬面をびしびし叩きながら土俵に昇るようなものである。ずっとのちに、眼光鋭き大「大使」萩原徹氏から、「君は俺よりフランス語ができると思つていな」と思いがけないことを云われ、びつくりしたが、こんな心理を読まれていたのであろうか。

パリを中心に私が最初にそして最も集中的に講演活動を行ったのは、十一年間にわたる一回目の長期滞仏中（一九六三—一九七四年）のことだつた。そのうち、一九六五年（三十三歳）から一九七二年（四十歳）までの七年間ほどは、たつぷりそれに従事した。本書には、その時期のものから三点だけを選んで、「講演篇（一）」として収めた。「『雨月物語』と日本の幻想世界」、「『国際スタイル』のかなた——日本現代版画展に寄す」、「象徴と神話——日本文化の展開」が、それである。日本大使館の委嘱で、美術展とセットして各地を講演して回つていたところで、徐々に評判が上がり、一九六七年には外務省からルーマニアの首都ブカレストにまで派遣されるに至つた。壇上、門脇大使の紹介に始まり、人民大学で満堂の学生を相手に二時間しゃべつた。その三年後には、パリで、名声高い国際文化団体「フラテルニテ・モンディアル（世界友愛協会）」



1. フォンテーヌ・ブローのシャトーで組織した現代日本美術展

において、松井明大使以下の日仏名士を前に、あたえられた演題「象徴と神話」を講じた。文芸新聞に「講演家として評価を確立」と書かれ、これが事実上、この方面での私のデビューとなった。

この演題は当時の私の思考を練りあげるのにぴったりだったように思う。日本神話の「鏡」をめぐる全くの自己流形而上学を思い切ってぶっつけて出したものだった。のちに、詩人高橋睦郎氏と初めて伊勢参りをした折に、内宮の正殿まえで口をついてこの発想を語りだすこととなる。「パリで深めたらしき思想」と、さすが鋭い直観をもって同氏はそのことを回想に書き記している。

注意深い読者は、本書に残された声の軌跡が以後ぶつとりと切れ、十八年間も途絶すること気づかれるであろう。その間に私は第一回目

の滞仏生活に幕を引いて帰国し、大きな人生の空洞を経験したあと、筑波で教鞭をとる身となっていた。

この帰国期間（一九七四—二〇〇一年）にヨーロッパに招かれて、二つの大きな講演を行っている。一つは、日本学の泰斗、ベルナル・フランク教授のはからいで、一九八八年に、同氏がその日本文明学部の主席をつとめる名門、パリのコレージュ・ド・フランスで行った全五回の「連続講義」である。フランク教授よりあたえられた「アンドレ・マルローと那智の滝」の演題で講じたが、これは大反響を呼び、パリのジュリアール社から出版されるに至った。以後、その邦訳をと望んできたが、初めて本書に収めて実現できたことで欣快にたえない。

筑波から赴いて行ったもう一つの忘れがたい講演は、一九九〇年、ポルトガルのリスボンで開催された「文化の対話——ヨーロッパと世界」会議での開幕基調講演である。この主題そのものには「日本」は入っていない。そこへ日本人が割り込みのような形で招かれて縦横に論ずる機会をあたえてくださったのは、『日本——理解の鍵』の著者、ルネ・セルヴォワーズ大使であった。セルヴォワーズ大使はコレージュ・ド・フランスでの私の講義を聴いて感銘し、知らぬ間に推挽すいはんの労を取ってくださったのだった。

このリスボンが、我がヨーロッパ講演行脚の最後となった。

最後となつてほしくないと願っていたが、再開の機会は二度と訪れなかった。筑波大学での十五年は、学生諸君には申し訳ないが、むしろ「講義」は自分には不向きと実感する日々だった。一講座、年三十回は、

竹本流からすれば間延びの感を免れない。これにひきかえ、「講演」のほうも、しかもヨーロッパの聴衆相手のほうが、緊張感があつて、よほど私の性に合っていた。

こうして十九年間、鳴かず飛ばすの歳月が過ぎた。しかし、夢捨てがたく、退官後、二〇〇二年から、第二のパリ生活へと戻った。同地で皇后陛下美智子さまの仏訳御撰歌集『セオト——せせらぎの歌』出版事業にたずさわり、それを終えて、いよいよ積年の夢復活の時きたると勇み立った。昔取った杵柄ならぬフランス語で、欧州一円に日本を語って回りたいと望み、手始めにジュネーヴ大学で「宮本武蔵」を講じた。時に、二〇〇七年秋、七十五歳になっていた。だが、身辺事情で急遽帰国となり、夢は永遠に断たれた。「講演篇（一）」の最後に収めた「武士道と日本的靈性——武蔵の場合」は、それこそ、我が見果てぬ夢の名残りにほかならないものである。

本書の執筆を進めている間に東日本大震災が起こり、それからちょうど一年半後の今日、筆を収めようとしている。その間、日本は、自然界のツナミばかりではない、いま現に政治外交上の四囲の激浪にも見舞われ、あらゆる意味で浮沈の瀬戸際に立つに至った。かつて、敗戦時には、「日本復興は日本文化から」との偉大な先人の覚醒と指導があつたが、いまはそうした声さえ聞こえない。私は、むしろ、これを真の国難と感ずる。

日本は、もはや、世界内でしか生きられない。

にもかかわらず、依然として大半が閉鎖的で、外向けのことまでが内向きである。外からは隠蔽的体質の

国と思われ、実際に、本音を隠すゆえに誤解を払底できず、国として大損をしている。次世代の若者は、文化の防人として、もっと向こう向けに、向こうの言葉で日本の真実を伝えてほしい。

われ、日本をかく語れり…

拙著が少しでも役立てればと願うゆえんは、これである。

西暦二〇一二年九月十一日、東京にて

竹本忠雄

目次

目次

緒言

講演篇 (一)

『雨月物語』と日本の幻想世界 一九六七年 ル・アーヴル文化会館……………16

15

夜陰の力を駆逐する「日本的たましひ」

上田秋成、命がけで禁断の世界に足を踏み入れる

闇を手探り進んだ日本の「夜明け前」のアルチストたち

「国際スタイル」のかなた——日本現代版画展に寄す 一九六七年 ブカレスト人民大学……………29

日本芸術のお家芸「ウキヨエ」を面目一新した「創作版画」の盛観

失われゆく「宇宙的いのち」と西洋的「個」の追求

一九五〇年代に現代日本版画の世界的評価は確立された

真の自由は「根源的サトリ」を得ずしては不可能

象徴と神話——日本文化の展開 一九七〇年 パリ、フラテルニテ・モンディアル協会……………42

「不在」が「存在」を証する宝鏡の秘密

一千年間に神話的象徴は芸術的記号へと転化していった

「遠さ」に隠れるものに注がれる視線——日本の超越的美観の源泉

現代日本のユルバニストたちの象徴的都市空間ヴィジョン

1

文化の対話——ヨーロッパと世界 一九九〇年 リスボン、コロンブス生誕五百年記念会議… 56

一五四九年——最初の日欧文化邂逅

長崎「二十六聖人」殉教の衝撃

「コロンブスとファティマ」

「出逢い」は「影響」より深し

二十一世紀に靈性革命が……

「正統的」たらんとした西欧

《暗在系》における物心一如

無意識——「集合的」から「宇宙的」へ

根元的日本の光世

武士道と日本の靈性——武蔵の場合 二〇〇七年 ジュネーヴ大学…………… 82

孫子の兵法と武蔵の兵法の根本差

死に臨んで騎士ロランも日本武尊も共に歌った——「我が太刀、はやー！」

「騎士道の中興」ジャンヌ・ダルクと「武士道の中興」楠木正成が成就した「国王即位」

「巖流島の決闘」——完全歪曲された武蔵の実像とは？

「文武両道」という危ういパラドックスを生きる

「アンデパンダン」画家ムサシ、フランスに推参

まったく独自の見性を表している武蔵の傑作絵画群

「武士道とは死ぬことと見つけたり」にあらず

講演篇 (二)

アンドレ・マルローと那智の滝——宇宙よりのコンフィデンス

一九八八年 コレージュ・ド・フランス 114

序言 ベルナルル・フランク 115

序論 120

第一章 芸術と死 131

発見

「やまとだましひの受諾者フランス」

第二章 芸術と靈性 173

《外觀》を破壊する——何の名においてか？

《空想美術館》とは本質的に西洋的ならずや？

第三章 芸術といのち 213

那智の滝にて

伊勢神宮にて

第四章 いのちと宇宙 252

日本におけるアインシュタインとマルロー

光源に向かって

エルサレムと伊勢——後記に代えて

対話篇

日本における死 アンドレ・マルローとの対話…………… 310

三島由紀夫の自決は西洋人のロマンチックな自殺ではない

日本の「セレニア」と西洋の「救霊」——東西文明間の至高の対話

輪廻転生と三島由紀夫 モーリス・ベジャールとの対話…………… 320

三島は、日本です！

幻想と規律、「全体芸術」の開放性と東洋的苦行

「輪廻転生」が可能な人々がある

西洋では「文武両道」は中世で断たれた

唯一神教的世界観が自然を滅ぼした

付録

『アンドレ・マルローと那智の滝』原著への評価…………… 340

竹本忠雄 ヨーロッパ活動年譜…………… 346

校訂者解説 竹本忠雄著『われ、日本をかく語れり』をめぐって…………… 357

吉田好克……………

掲載図版リスト…………… 367

装丁 田中孝和

309

339